





加  
667  
止



本朝俗談志五之卷

- ① 常陸麻鳩龜卜 いしらのうまきりく
- ② 江戸傳通院えんつういん之野蛙 ひまゐ
- ③ 上州大光院じやうしやうだいこういん之穿蛙 くわんわ 屏島立
- ④ 高野花供 たかのはなぐ 三月上人
- ⑤ 河内上太子 かんのじやうたいし
- ⑥ 江戸神田社石えんじやまのくわんじや之水鏡 みづかがみ
- ⑦ 志州新野石 ししやうしんやいし
- ⑧ 京蘇きやうそ之竹伐 たけう
- ⑨ 箱根大釜 はこねおほくま
- ⑩ 真州大水晶 まゐしやうおほいすずく
- ⑪ 出羽大章魚 でつやおほいすし
- ⑫ 江戸品川大亀 えんじやうしんがわおほいかめ
- ⑬ 野州大牛膏 のしやうおほいぎゆう
- ⑭ 杉列すぎり作平松 しやうへいしょう

香粧上人雷除

屏島立

撫集抄

三月上人

一月草







伊奈の館からより十町約ありなりを蓋す  
に居も安き所なるのや後を思ふるし奈子三由に  
腹水ハヤクを尺重ハヤクを容ハヤク積ハヤクつらも十四島城の如くなら  
平又して奈を下り北の河との夜ふの形を色と  
かりり奇しく○鹿鹿太神宮武魔植尊人  
常陸の一宮にして二千石の積あり 八列春日  
才一の神後山列大原の社伊同神

○唐銅の大きなる甲由目以西上綱國楢中  
鹿嶋大神宮ゆひの山積あり又藏の甲由目あり  
こころに人終りむいし神軍の時山神は甲由を  
おされ鬼神を退治し行かくなり○要名聖人淡委

○所は改公臨より浦河氷く十間より二十間とりの  
使多は法門くしは可もて旅難をとりはは深き事  
大人少人よやきしは万人乳を乞ひ南社妙きもの  
初より○高田系ゆきしむし神軍のあり  
可も其血去り際りとして赤さふあり

○鹿嶋立世俗徳立の月を鹿嶋立と云ふあり  
師海波山神を祭るしは神の由に徳立あり  
ゆへに云ふ是の社よりは神あり

鹿嶋のあらくこの神は小はあらしあはれいし人かき  
くまうらよ 鹿嶋神  
神を立神源由係をふ  
徳の安んを新くする徳あり人仙へもはよ







寺に於て百石の徳年中の事刻しり登上人ミケノ省シヤウ同  
 三月月のかゝらわつと光あつとんして三月月ミチノキとト後  
 本寺の堂列久彦那岩隈の御主白吉志之守義光の  
 子と云明神子初とて旅び曆夜四年正月九  
 五日と述べ又彦死の後母とてあひて草土山菅福の  
 り実と人子授して難ナシ以て十時八歳と二十五歳に  
 して言水の宗義に真実を授けりて人 密教ミツキョウ  
 法幢院社存に更々 台宗の真源法印にそふ 禪宗の  
 但馬の天命月察二老師 神道ハ 河部大崎其  
 和歌ハ 河津所とて古今の序位十巻を著  
 寛永二十七年九月十九日ノ由リ宗ノ叙ス増上寺用山酉登上人  
 の中ノ也



大光院



三 大光院並聲堂

上州新田大光院の聲堂の、ワカボのどあき中良  
用と深谷香報上人、勤孝の始なりと辨らん  
————寺の二百名の御おれをいふ  
此の聲堂○或時雷鳴りし、ついでに香報上人  
御遊臥坐し、根想辨念の座の若し雷おれし  
懶きもの、ついでに御、索の印をひきんてかき  
し、此の雷大きく、聲堂————  
此の聲堂をいふ、其の上つて、ついでに人の  
声あり、此の聲を降し、ついでに聲堂——  
印をいふ、ついでに、ついでに、ついでに、ついでに

今も雷鳴りし香報上人の、ついでに、ついでに、ついでに

○雷除名号 香報自号六字名号板行ちり

中六字名号依么左震法雷曜法電右以法音覺世間

大光院香報益とあり、大光院とあり、後、大う、一尺、

は、大号、右持の家、雷おつ、ついでに、ついでに

○海龍水と云井あり、右の聲を、ついでに、ついでに

は、井を、ついでに、ついでに、ついでに

○早魁のついでに、ついでに、ついでに、ついでに

あり、ついでに、ついでに、ついでに、ついでに

為、ついでに、ついでに、ついでに、ついでに

関東十八極梅の、ついでに、ついでに、ついでに







あつきの三祐持はねりかきそくを明と致す故に  
○此持 朽木の太木し節の鱗おきかへくそのまじり  
をまがくし雨を仰ぐがゆゑに死あつて人よさら  
し大蛇のうらみありし云俗傳し

⑤ 上太子石碓の驛

河内赤土の太子の聖徳太子の御影を周り北西の方  
より丸く小川のあつきの場ありて中へ洞し常の御影  
をんくしして年を流すなり御まねかへ場の御影を  
よも空申幅二尺の地中へしらの石碓の驛のみ  
とく並ぬ香積の人の心置かきあひ百十成り十三五  
可しかつて人々皆通ひ二丈やれをいふありきと云

⑥ 乙の石水跡

いづれ神田社の持持り丸きふのの御影ありあり  
指列作善のま井の巻の折ししては年御影の  
そ御影奉行ありきと云は伝足きて、御影に作  
りし御影ありかきし御影ありし御影あり  
し御影ありし御影ありし御影ありし御影あり  
大御神ありありけりしけりし御影の御影あり  
御影ありし御影ありし御影ありし御影ありし御影あり  
御影ありし御影ありし御影ありし御影ありし御影あり

⑦ 新野石

志州香志郡破部にありし石ありし三十間と云ふ







年々神の人竹を伐るといふと色芥子ほくそ火の  
 火のあつし事をいふゆゑの太刀し又十九日の夕トシニヤ  
 大杉大杉の葉を折平梅梅と比敷ふ雲母雲母をすまはす  
 てさうらに清き火の粉粉をほきてさ通す満くさう  
 とゆふ火のふを素足素足のさうらゆの陰のふり  
 月夜昆虫の門門へ生生物をゆふ家家をあらうか  
 申にいふとあ十九路のゆいあまをゆいゆい  
 ちやうさう暗暗西西のゆいゆい生生をせやるは  
 うしうなる生生の社社のふりゆいゆいゆいゆい  
 西西のゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい  
 のゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

九 大釜 おほくま

相列箱根の権現権現の太刀二つあり深さ六尺一丈七寸  
 余中より西西の太刀二つありゆいゆいゆいゆいゆい  
 のゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

- 古記云天平宝字年中造立 箱根大釜別所別所福也
- 宗近の太刀を秘長二尺寸寸ありゆいゆいゆいゆい
- 清原の太刀を秘長二尺寸ありゆいゆいゆいゆい
- 長閑の太刀を十春切の太刀ゆいゆいゆいゆいゆい
- 赤木の刺刀を十春切の太刀ゆいゆいゆいゆいゆい

其がゆいゆいの什宝あり又清島一通一通を成時成時をゆい



夜前々隙火忽消夫寺每観悦子可  
委曲で申西湯忍増海云 時宗

とあり或役に云々其の河高きわい十宗時宗と

⑩大水晶

奥洲金山山子水晶多し高九尺一丈をりたる  
好ありは心の伝言なり一五室の字子馬橋と云倭  
く一里沖の海にありは石の精に今海産の石也  
聖武帝の時奥列小甲より西より始て黄金を  
ちりりしりもは心のなりし其時家持の事

とくらきの湯代茶をなかりみらのふはあきか  
け西の今氣とありしめてまじりまじりと云

⑪大甲魚

出羽國庄内領花橋ハ猿橋といは西の箱ハ七八尺一丈  
とらるのふと多し浦人あをいりて干物にせり  
その干しを食をよそははれし帆のくはに甲をし  
庄内より海と十里とあり

⑫大亀

公列赤川の沖子大きく亀あり此天赤波の所  
らに海より甲の大さきりて人をくつ  
せりふとこの川らありし船舟痛水ありのり  
つらき事ありしとふりし人を物をれ害をあり  
うそなり



⑬ 大牛亭

下野國栗山の邊及び日光より七八里小栗列  
界くしび西の牛房に自然生じて長一尺をこ  
ゆるこふ口めて二寸許あり荒々しく甚其  
は胎を以て他を樹る土地をきくひて生せん

⑭ 行平松

柳列矢田部酒戸の邊香小松系の子に生れり  
大木あり信傳ゆをこもつ樹少く一朽て以  
河原のふゆ物を樹てこもつて枝葉悉く束密  
たり元々樹るに其かろく今老樹となりて  
梢枝も朽て幹の二周はかりに樹り

○破列松そちれ一ありり凡は浦名との熱めくとも  
行平の海沿を樹てて枝葉より東へ流れ  
幹より東へ

葉は西の風より西風つる多し樹の他なき  
五若木若木

河洲上野山福祥寺世祇頂寺堀内あり幹  
を朽て根より一方の間隙よりかたより出  
頭をむきよし其株より樹の氣條のまき  
身より生るるありありありありありあり  
其幹は冬もむくむく朽れをちへ今も  
か生るる若木あり



むかしのころは、及ぶころへ、為寺に

氏藏坊并慶あるを、死を割るのふり曰

此花江南、所産也。一枝於柳、盗之

事者任天、永紅葉之例、伐一枝者

可剪一指

壽永三年二月日

辨慶

たの自る子し、初物候、去しける其の計、柴取ら  
熟望の程、維新し、古来の為、一管、熟口の、しに  
昔の草の、わら、葉わ、り、わ、り、た、る、や、そ、し、ち、ま、り、り、と  
云、り、生、の、あ、り、し、や、一、筋、物、し、云、辨、道、一、管、出、れ、い  
て、我、師、の、所、お、り、り、と、一、敷、盛、の、原、わ、り、甲、田、日、と、せ、り、し



能因の寺

行平松



連珠さく毛のうら画倭く朝聖日月のあむる  
○裏の谷の石壁の谷二の谷のり海江の地あり  
大きさ七八のうらの五輪しは舟の強人少く  
握を廻りしむ後六七所うらむらう

⑬ 能國橋

能國橋と郡古曾都にあり能國は橋を毛  
一筆のちのうらむる人か入おの強く  
しつもの秋の月神木相の邂逅今勢有り  
海とく俗名永澄と云橋の住人少く  
世のしむらむる人少く  
○家系伝ふむらう 初秋に昨河志

能國とありて長徳を所しはあ初肥後進士  
心けり時とのゆあり長徳の家  
換りて車と云ふもの  
けりて西念と云ふはありあり  
かよ運のりきにかのりあり  
してよの能國と云ふはありあり  
長徳云 心けりて長徳を所しはあ初肥後進士  
人よ何ありしはありあり  
又云加久徳の長徳力長徳と云ふはありあり  
能國とありてありあり  
川出ありてありあり



〜…野々の中は…  
我々も望し長柳の橋は…  
時の…  
わ。何をと…  
整く…  
かのく…

(十七) 大江山

丹波少大は…  
少る…  
全徒二人…  
その恨…

俗傳…  
又碓氷…  
碓氷…  
碓氷…

(十八) 報不知

我後海…  
両方…  
かく…  
れき…  
はみ…  
から…







伴言 五

⑨ 八親峠 やつらみ

岩屋國土浦八親峠の沖よりよく見ゆらひ子  
て東海の回航多しは心を志ありしは瀬浪を  
くも極むのうきふりてむしはあつ人掃し是  
業をてて自中をあるしむし奥列小の浪  
舟出の時白波の隙を舟の楫をびりて日は遠  
あては海波のあゆむ方ふを八合に志ありて  
とよ八艘の舟一皮に船をそれて船のふ  
とく業げまて八艘もはに船にりて入す  
たつを別舟玉の神の舟若く夜ひ八の親に  
るを海へは神にまら其八の親合は舟の



親志しに

鞠の神











花車の犬角の部ぬし令将の扱匠とて成る  
故に齋<sup>い</sup>るまをぬしぬとある世の二十二の会に四神を  
加へて四十の楕の足一つとて他も令て二十を一つ  
を八つを倍する八卦し八角の上中合て六十四卦  
其四の卦凸<sup>へ</sup>連の夕<sup>し</sup>にげきの飛支楕の外余子  
羽ふす又表の空面めり血溜とて凶事の改むるを  
四角の地ののりらしきるひれきい海の形し

碁のふしと<sup>し</sup>二目し 中<sup>ま</sup>はと<sup>り</sup>ち<sup>ち</sup>一<sup>し</sup>五目<sup>の</sup>を月の  
中<sup>ち</sup>に<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>五目<sup>を</sup>倍<sup>に</sup>し<sup>し</sup>  
家戯の神段花香の支馬を有く二段<sup>の</sup>花香<sup>は</sup>  
一香<sup>は</sup>花<sup>は</sup>一香<sup>し</sup>之<sup>段</sup>花<sup>は</sup>花<sup>は</sup>花<sup>は</sup>花<sup>は</sup>一香<sup>角</sup>  
一香<sup>は</sup>花<sup>は</sup>一香<sup>し</sup>之<sup>段</sup>花<sup>は</sup>花<sup>は</sup>花<sup>は</sup>花<sup>は</sup>一香<sup>角</sup>

八段香花<sup>ト</sup>平のの交九段<sup>の</sup>花<sup>と</sup>先し 免状出<sup>ル</sup>

廿四 鞠の神

京中汴門西洞院<sup>子</sup>精大明神の宮あり大納言成道<sup>つ</sup>  
と記わく則中<sup>や</sup>宅<sup>の</sup>の地<sup>に</sup>に氏<sup>の</sup>系<sup>を</sup>之<sup>の</sup>鞠<sup>の</sup>の神と崇<sup>め</sup>  
○鞠はヤツワアリヲ<sup>つ</sup>れ声<sup>か</sup>る<sup>る</sup>成道<sup>つ</sup>千日<sup>の</sup>鞠<sup>丸</sup>あり  
千日にみらきる夜<sup>の</sup>鞠<sup>の</sup>ありけ<sup>る</sup>るに二<sup>の</sup>日<sup>の</sup>の  
小<sup>の</sup>丸<sup>は</sup>持<sup>る</sup>もの<sup>の</sup>人<sup>を</sup>西<sup>の</sup>人<sup>か</sup>ら<sup>し</sup>精<sup>子</sup>似<sup>て</sup>なり  
くらまぬを<sup>抱</sup>き<sup>る</sup>る<sup>る</sup>き<sup>る</sup>もの<sup>を</sup>何<sup>れ</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>な</sup>し  
あ<sup>ら</sup>く<sup>る</sup>る<sup>鞠</sup>の<sup>信</sup>し<sup>と</sup>あ<sup>ら</sup>く<sup>る</sup>眉<sup>の</sup>か<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>髪<sup>を</sup>わ<sup>く</sup>  
も<sup>も</sup>一人<sup>の</sup>顔<sup>は</sup>春<sup>の</sup>揚<sup>花</sup>一人<sup>の</sup>夏<sup>の</sup>安<sup>林</sup>一人<sup>の</sup>秋<sup>の</sup>園<sup>と</sup>  
ひ<sup>を</sup>文<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>ね<sup>の</sup>色<sup>は</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>是<sup>が</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>なり



同く云鞠わつ所いその暇ある一暇き所ふけく子約也  
歌柳はし梅の栖ゆ今今うう後さるものありと  
いふよめおちし梅をよめおちしなりも一とひて其か  
いせころさねし鞠をころころヤリワアリ。フ。とら  
ゆりの性のみこと也又四もよの樹と載るもあ梅の  
位はころころ鞠をころころとる

鞠をころころとる鞠をころころとる鞠をころころとる  
に鞠のあらしをかく鞠のあらしをかく鞠のあらしをかく  
の常高梅のころころとる鞠をころころとる鞠をころころとる  
鞠をころころとる鞠をころころとる鞠をころころとる

大尾

延享丙寅天

米山翁六十有七書

怪談百物語入野書牛と汗棟小  
先しのおまこと皆付中イニニエの法タニして  
今也現あり付頃日編集五冊者  
米山翁眼尖の足亦わ其地の人  
委しく温問て言説顯然多あり夫し  
先生は多年地理志厚故法固  
名山旧跡人物奇異及故子向縁  
普日日記月こ集料稿文箱堆



吊古是也再乞之不止終付剝削  
題本朝俗諺志云爾嘗丙寅冬至日  
東武書林池田三酉堂有佟跋



前編五冊 里人談

次編五冊 俗諺志

右之分出來





